

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

問題児＋欠陥製品が異世界から来るそうですよ？

【作者名】

零崎良識

【あらすじ】

請負人の仕事を始めたばかりと戯言遣いはある日、『人類最弱の請負人殿へ』という手紙を見つける。

その手紙を開くと……

そこは異世界だった

プロローグ

請負人の仕事を始めてからどれくらいたっただろうか？

そんなことを考えながら、ぼくは自室で一人静かにコーヒーを飲んでいた。

仕事がないとかでは決してない、断じてない！

最近潤さんが現れないから平和だとかも思っていない！

と心の中で良いわけをしていると、机に見に覚えのない手紙が有ることに気づく。

「なんだこれ？」

手紙には『人類最弱の請負人殿へ』と書かれている。

「そりゃ人類最強の潤さんと比べたら最弱っていうのも言えるけどね」

皮肉なのか、嫌がらせなのか、どちらにしても……

「こんな事するのは潤さん位だよな」

そう言いながら手紙を開くと

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの“箱庭”に來られたし』

次の瞬間

「えっ？」

ぼくの視界は間を置かずに開けた。

上空4000mほどの位置で投げ出されていた。

ぼくの前に広がるのは——完全無欠に異世界だった。

第一話

上空4000mから落下したばくは緩衝材のような薄い水膜を
通って湖に投げ出される。

「きゃー！」

「わっー！」

ボチャン、近くで着水音がする。どうやらここにいるのはぼくだけ
ではないようだ。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放
り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだ
ぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「……………。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょ？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

二人の男女が鼻を鳴らして服を絞っている。

「いじい……………どいじだんじっ。」

そう言ったのは別の少女。どうやらぼくを含めて4人が呼び出さ
れたようだ。

「一応確認するが、お前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。――私は久遠飛鳥よ。それで、その猫を抱きかかえてる貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。それで、野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪ど快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

「それで、最後は貴方ね」

「ぼくはただの『欠陥製品』だから気にしないで。と言いたいところだけど、空気は読まないよね。でもぼくは本名を名乗った相手がいない、というのが自慢だね。イーちゃんでもいっくんでもいっきーでも、とりあえず好きに呼んでいいよ」

「よろしくいっきー」と言ったのはケラケラと笑う逆廻十六夜

「よろしくねいっくん」と言ったのは高圧的なお嬢様の久遠飛鳥

「よろしくイーちゃん」と言ったのは無表情で掴めない春日部耀

ぼくは随分と個性的なメンバーだなと苦笑した。

(うわぁ……………問題児ばかりみたいですなぁ……………)

そんなことを思いながら物陰から4人を見ていたのは彼らを召喚した黒ウサギだった。

第二話

十六夜が苛立たしげに言う。

「で、呼び出しといて誰もいないってのはどう言うことだ。いついつときは案内人がかがあるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……………。この状況で落ち着きすぎてるのもどつかと思っけど」

「まったくだね」

ふと十六夜がため息交じりに呟く。

「……仕方がねえな。こうなったらそこに隠れてる奴に聞くか？」

「なんだ貴方も気づいてたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの2人も気づいてたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「あれだけ視線を向けられたらそりゃね」

そっ言って4人が視線を物陰に向けると

「や、やだなあ御4人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは穩便に御話を聞いていただけたら嬉しいのでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「空気を読んで断るよ」

「あっは取りつくシマもないですね」

バンザイと降参のポーズをとる黒ウサギ。

すると春日部耀が不思議そうに隣に立ち黒ウサギの耳を根っこから鷲掴み

「えい」

「フギャー！」

力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよっとお待ちを！触るまでならまだしも初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとはどついつ見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります！」

「へえ？このウサ耳って本物なのか？」

今度は十六夜が右から掴んで引っ張る。

「……………。じゃあ私も」

「ぼくは見てるよ」

「ちょ、ちょっと待——！」

今度は飛鳥が左から。左右に力いっぱい引っ張られた黒ウサギは言葉にならない悲鳴を上げた。